

世田谷区民会館・区庁舎を考えるシンポジウム
「半世紀を迎えた世田谷区民会館+区役所庁舎」Part2

平成20年8月2日の第1回シンポジウムに引き続き、第2回のシンポジウムが、暮れが押し迫った12月21日(日)に190余の参加者を集めて、世田谷区民会館で行われた。師走という多忙な時期ではあったが、第1回の110余に比して参加者が増えてはいたが、一般市民に比べ、建築関係者が多く、建築家を通じて、関心が世田谷区を超えて横に拡がりつつあるようである。反面、事前のPRにも係わらず、区・議員の参加が殆どなかったことが気掛かりではあった。

(1) 小林 JIA 世田谷地域会代表挨拶

小林氏のご自身の経歴を交えて、モダニズム建築への関心を吐露され、「世田谷区民センター+区役所庁舎」は建物だけでなく広場、街並み形成への持つ意味を含めて、広い議論のきっかけにしたいと、世田谷地域会の活動の紹介もされながら挨拶された。

(2) 作家で書誌学者の林望氏

林氏は「時が磨くもの—イギリスの建築と町並みをめぐって」と題されて、ご自身が住まわれている小金井近傍の景観変化の早さに比して、研究のために滞在された英国での変わらない景観、建築をエターナルなものとして捉える考え方、そして、建物、町並みの保存とその活用への努力の差に、建築観、歴史観ひいては文化の差があること、また、生活の時間的な連続、それを表す町並み、結果としての景観を維持する事が歴史そのものを語ることであること等を、スライドで事例を示しながら紹介された。具体的には、ナショナル・トラスト(歴史保存信託財団)、ランドマーク・トラスト(歴史的遺産活用団体)、そして、英国の景観を美しくする国民運動ともいえるシビック・トラスト(1957年半民半官で設立。町、村、田園における「美」を推進し、醜いものと戦うチャリティ団体)、更にこの運動の元となったローカル・アメニティ・ソサエティ(市民の自発的活動(「...as it was」という題名の書物がどこの町にも売っていて、住民は代替わりしても変わらない町の景観を誇示している)などの事例であった。

(3) 松隈洋氏(元前川事務所所員、京都工芸繊維大学教)
松隈氏は前回と同様に「前川国男と世田谷区民会館区庁舎」と題して、東京ステーション・ギャラリーを皮切りに始まった展覧会「モダニズムの先駆者—生誕100年・前川国男建築展」が延べ57,000人の来場者を数えて関心を集めていることの紹

介に始まり、前川国男は、2年間のル・コルビジェのアトリエでの学びのあと、27歳で木村産業研究所(弘前)を手掛け、弘前に8作品を残し、それらが町全体で大事に扱われていることを先ず紹介された。(弘前教育委員会が「前川国男建築マップ」を発行し、市内ビジネスホテルの市内案内にも置いてあると云う。)次いで前川が関心を強く持った「広場」「都市のコア」についての解説をされた。ロンドンでのル・コルビジェとの再会での語らい、ロンドンのロイヤル・フェスティバルホール(1951年)における都市の生活のなかでの居間的空間(吹き抜け・ホール)の重要性が強く意識され、戦後の復興のシンボルとしての神奈川県立図書館・音楽堂(1954年)、京都館(1960年)、東京文化会館(1961年)紀伊国屋ビル(1964年)、東京都美術館(1975年)において、夫々の大きな設計テーマになっていること。又、建築の使い方への要望の変化を受け止めながら、町並みの景観を変えない対応の重要性を、テート・モダン(火力発電所→展示・美術館)大英博物館グレート・コート(書庫→ホール)等を事例として紹介され、直して使う我が国での事例としても「国際文化会館」(2006年)の例もあり、世田谷にしかない景観として9階建ての区役所が適しているか?と問題提起をされた。

(4) 経緯と区報告書の問題点

金山世田谷地域会会員が今日までの経緯を時系列的に報告し、鱈坂会員が世田谷区の6報告書で取り上げている建替と結論付けた内容に対し、以下の理由で、現区民会館・区庁舎を使い続ける可能性があるかと反論された。(別資料)

- ① 不足しているというスペースについては、一部の建替や増築でスペースを確保することは可能。
- ② 災害拠点や情報技術、環境負荷低減への対応などについては、再生・改修により新築と同様の耐震機能や機能更新が可能。使い続けることが環境負荷をもっとも低くするのはないか。
- ③ 築後経過の長い建物ほど経費増が見込まれるに対しては、大規模な改修を一度行えば、維持管理や修繕費は新築の場合の経費に近付くので、一概に改修が問題とは断定できない。

この他、それぞれの報告書について、問題点を指摘した別資料を紹介された。

(5) パネルディスカッション

世田谷地域会会員で前回司会を勤められた野沢氏の司会で、各講師が基調意見を概ね以下のように述べられた。

■林泰義氏（まちづくりプランナー）

まちづくり領域、NPO、市民一緒にと、縦割りではない世田谷区のまちづくりに係わって来て想うのは、世田谷は市民参加、市民の自治に積極的なところで、1990年代に有名になったところである。庁舎と一連の建物は傑出した建築家の設計によるものであり、そのことを「誇り」を持つべき、日本で初めての住宅条例が出来たところでもある。その理念も持てば、① 建替ではなく、②そのまま利用し、③年を取った建物を持続して使う、④時代は動いており、様々に横に繋がって行く、横に広がって行くこと等を市民はサポートする筈だと思う。

■小林正美氏（世田谷地域会代表、明治大学教授）

丹下健三事務所が旧都庁を壊し新都庁を設計したのを知り、ボストンではSouth End地区で古い建物を改修しながらオシャレに使っていることを勉強した。新しい近代建築を造るだけでなく、改修する方向での建築の在り方の意義を感じている。国際文化会館に係わり、壊す主張をする人の理由は、「使いこくれば壊して建て替える」という行政の主張と同じだと思う。日本では機能とライフサイクルコストが全てで、文化の価値が入ってこない。歴史・環境教育、が市民のプライドを造成する。我が国の建築の価値観は不動産価値だけで、地域に地域資源としてのランドマークが少ない。この世田谷区民会館を文化財に指定しても良いと思う。

■野沢氏（司会）

神奈川音楽堂の計画資料として勉強をしたロイヤル・フェスティバルホールや神奈川音楽堂（20世紀の重要な文化遺産としてドコモより日本におけるモダン・ムーブメントの建築20選に選定）の話しを師匠である大高さんから聞いた。建物を使い続ける習慣が日本にあったのだろうかと思う。

■林望氏

醗酵時間が経つと、腐るものと、味が良くなるものがある。時の経過で、醗酵に耐えられるものと腐敗するかについては、DNAのような生れ付きの性状がある。これを見分ける眼力を市民が持たなければならない。仏寺は古いほど良い。眼力が問われる。

■松隈氏

東京文化会館は大改修、京都も残す方向、世田谷がカードを出すことが期待されている。

■野沢氏（司会）

近年、古くてもきちんとした建物を残すことをコンペで求める例が出て来た。今井兼次設計の大多喜市庁舎は既存を残しながら

らの増築である。他に多くの人の話を聴きたい。特に今日出席戴いている神谷先生、早稲田の穂積先生、大宇根元 JIA 会長、奥村さん、坂田誠造前世田谷地域会会長などであるが時間が無いが。先ず神谷先生。

■神谷氏

世田谷区民であり、区公共建築委員会を3年努めた。世田谷区役所の有様をモデルに公共建築を創って欲しいと大場前区長から言われたことがある。

■穂積氏

英国のシビックトラスト賞（1957年に設立された町、村、田園における美を推進する半民半官の信託財団で、第一に建築と都市計画の質の向上に寄与し、第二に芸術的な歴史的建造物を保存する、第三に田園地帯の美しさを守る、第四に貧弱なデザイン、無頓着な醜さを排除、第五に公益を刺激し市民のプライドを鼓舞すること）が有効と思う。

以上で時間切れ後は懇親会という幕切れ。

ホワイエ、ホール、ピロティ、広場といった人が集まる、集まることの出来る空間の確保と設え方が民主的社会の基礎として大事なことであること、又、生活の時間的連続性を歴史として、それらの外部空間を含めた建築物・町並みに景観として刻み、保存することの生きた教育資料としての重要性を再認識させられるシンポジウムであった。

（田邊 峰雄）

参考

■ 林望氏紹介の英国の事例

1. ハシグフォード^{グレイ}の12世紀に建った住宅、ケンブリッジ
2. イングランド^{中西部}にある16世紀に出来た村、レイコック
3. ラドマク・トラストの事例→教育的意味
 - ① 壊れ掛かった古い建物を買って、過去の状況を想定して改修して貸し出している例
 - ② モー^ス城の城門を改修してホテイ^{ハウス}として使用
銃痕も残る
4. シェック^{トラスト} (1957年設立、半官半民)
 - 目的
 - ① 建築と都市計画の質を高める
 - ② 芸術的な建造物、歴史的伝統のあるものの保存
 - ③ 田園地帯の美しさを護る
 - ④ 貧弱なデザイン・無頓着な醜さの防止と除去
 - ⑤ 公益を刺激し、市民のプライドを鼓舞する。
 - 活動 (建築をエターナルなものとする)
 - ① 相談し、アドバイスを貰う
 - ② 「トラスト賞」を出す
自治体に申請→
チェック^{トラスト}→利益を持たない専門家+地元の素人の審査
→金品無し、名誉だけ (プレートを貼る)
 - 事例
 - ① テームズ川沿いの再開発
5. ローカル・アムニティ・サザイ (チェック^{トラスト}の元になった代替わりしても変わらない景観の修景的運動、紳士協定、19世紀)
 - ① 古い住宅→ホテイ^{ハウス} 70物件/全英 (殆ど100%稼働率)
 - ② 19世紀の駅舎→カジノ
 - ③ ケントにある15~16世紀の石橋 (アチ橋) 1車線使用
 - ④ グロバレイ (19世紀漁村のあばらや) →50年掛けて修復
 - ⑤ スピラー^{ファクトリー} (コセット工場→コビ^{ユーター}工場) 労働環境向上